

[博士論文概要]

日本における国際的スポーツ経営人材育成の
可能性に関する研究
-MESGO 東京セッションを事例として-

2020年

塚本 拓也

筑波大学大学院 人間総合科学研究科
スポーツウエルネス学位プログラム

第1章 緒言

筆者は TIAS を通じてノンエグゼクティブ向けの教育実践を行うさなか、アイルランド・ダブリンで行われた欧州スポーツマネジメント学会において、MESGO を運営する関係者より、2018 年に MESGO の大学院プログラムの一部を東京で開催するためのアカデミック・パートナーの打診を受けた。MESGO はスポーツエグゼクティブ向けの教育プログラムであることから、筆者はノンエグゼクティブ向けの TIAS の経験を活かしてエグゼクティブ向けに発展させた大学院プログラムを日本でも開講することの可能性について課題意識を持つようになった。

先行研究の検討から 4 つの点が明らかとなった。まず 1 点目は、欧州のスポーツマネジメント大学院はスポーツ組織と戦略的アライアンスを組み、さらに組織ガバナンスを工夫して、複数の大学で共同学位を授与するなど日本にはみられない特徴がある大学院プログラムを構築していたこと。2 点目は、欧米のスポーツマネジメント教育では民間教育組織の修了証ではなく修士号の学位を授与すること。3 点目は、欧米では近年エグゼクティブ向けの教育プログラムが通常の修士課程と別に開講されていること。4 点目は、講義評価のためには学部学生や通常の修士課程の評価と異なる対象者であるエグゼクティブの学生のレベルにあった尺度が必要であることがわかった。

本研究の目的は、国際的なスポーツ経営人材を対象とするエグゼクティブ教育を日本の大学院プログラムで開講することの可能性を探ることとし、東京で実施する MESGO の大学院プログラムを TIAS に勤務する筆者が教育プログラムを構築し、教育プログラムを提供する実践を行うアクション・リサーチを実行することとした。本研究では、我が国におけるスポーツエグゼクティブ教育の可能性を探る目的を達成するために、(1)スポーツエグゼクティブ教育における講義内容と方法、(2)スポーツエグゼクティブ教育におけるスポーツ組織との連携可能性、(3)スポーツエグゼクティブ教育における教育環境、の具体的な 3 点の視点から考察を行った。

第2章 MESGO 東京セッションの構築及び運営プロセスの検証

第 2 章では、運営者側の視点から、日本で初めて国際スポーツ組織のエグゼクティブを対象とした MESGO 東京セッションの講義内容と方法、さらにスポーツ組織との連携について生じた課題とその解決までのプロセスと要因についてアクション・リサーチを用いて分析した。

まず、MESGO 東京セッションの教育プログラムの構築を通じて、日本でスポーツエグゼクティブ向けの教育プログラムを開講する場合の講義内容に関する重要な示唆を 5 点得ることができた。具体的には、(1)アジアに関する講義内容を導入すること、(2)多様なスポーツピックスを取り入れること、(3)新しいスポーツ界の動向を講義内容に入れること、(4)世界のスポーツ界で

共通する課題を講義内容に入れること、(5)スポーツのトピックスでは日本でしか学ぶ事の出来ない内容とアジア全般の内容のバランスをとることが必要であることが示唆された。

続いて、講義方法に関する重要な5つの示唆も得ることができた。具体的には、(1)座学だけではなく、体験型プログラムを入れた講義方法が大事であること、(2)スポーツと関連する場所に移動して、そこを教室として利用することが大事であること、(3)アジアと欧州出身の学生を同一のグループに配置し、地理的に多様なグループによるワークショップが効果的であること、(4)学生に意見を述べる時間を与えることは教育効果があること、(5)講義時間と質疑応答の時間配分では、質疑応答に多くの時間をさくなどの工夫が求められることである。

次に、スポーツエグゼクティブ教育におけるスポーツ組織との連携可能性について3点の示唆があった。(1)講師の派遣及び会場の使用を断わってきたスポーツ組織はエグゼクティブ向けに英語で講義できる上級職員が少なく、下級職員は英語を話せるもののエグゼクティブ向けの講義ができるレベルではなかったこと。さらに、(2)日本のスポーツ団体は大学と連携し、教育プログラムを構築及び提供する機会を利用してともに学ぶ意識は希薄であること。最後に、(3)スポーツ組織側が欧州の階級社会やその文化を理解していないことが原因で、エグゼクティブ教育とノンエグゼクティブ教育との差異を理解していないことが示唆された。

スポーツエグゼクティブ教育における教育環境については、運営における補助的サービスに関する重要な示唆を3点得ることができた。まず、(1)エグゼクティブが満足するホテルが存在する都市で教育プログラムを展開することが重要であること。続いて、(2)ホテルと講義会場の移動では、タクシーより大型バスで移動する方がエグゼクティブである学生が一同に介して移動することが可能で、到着に時間差が生じることがなく効率的であること。最後に、(3)昼食のケータリングでは、質の高いケータリングが必要である、ということである。

一方で、スポーツエグゼクティブ教育を運営するために必要なその他の条件も明らかとなった。例えば、日本でスポーツエグゼクティブ向けの教育プログラムを開講する場合、講師の選定、スポーツに関連する講義会場の交渉及び選定のために、スポーツ関係者に協力を仰ぐ人脈と知識や情報を持つコーディネーターを大学院を運営する事務局に採用する必要があることが示唆された。また、講師との事前打合せは十分にすることが重要であり、英語を話せない日本人講師にはスポーツ用語に詳しい通訳者を事前に確保しておくことが必須である。最後に、スポーツエグゼクティブ向けの教育プログラムでは、エグゼクティブである学生が国際スポーツ組織の意思決定者でもあるため民間企業からセールスを受け商業的に利用されないために、コーディネーターは講師や教室となる講義会場を民間企業に依頼する場合は学生と民間企業との距離を適切に持つ配慮が必要であることを学んだ。

第3章 MESGO 東京セッションにおける成果の検証

第3章では、受講する学生の視点から、スポーツエグゼクティブの満足度を高める要因及び不満足となる要因を教育プログラムの評価に対する質問紙調査を用いて明らかにした。まず、単純集計の結果から、今回のMESGO 東京セッションは学生側にとって満足度が高いセッションであることが明らかとなった。質問紙の自由記述回答のテキストマイニング及び定性的分析では、講義内容と講義方法が重要であることが示唆された。さらに、満足度を目的変数とした重回帰分析においても、可変的な資質である「知識の習得」、「講義内容」、講師の対応の「講義の長さ」と「リズム」、補助的サービスの質の「ケータリングサービス」、講師の対応の「講義資料の質」の評価が学生の満足度を予想するモデル式の説明変数となり、これら5つの説明変数は全て満足度に正の影響を与えていた。

第4章 総合考察

第4章では、第2章と3章の結果及び筆者のノンエグゼクティブ向けのTIASプログラムでの経験との比較から、我が国におけるスポーツエグゼクティブ教育の可能性について検討した。その結果、筆者はすでに幅広いスポーツピックス及び世界のスポーツ界が抱える課題に関する講義内容をTIASの講義で導入できていることから、エグゼクティブ教育においても幅広いピックスや世界のスポーツ組織が抱える課題を講義内容に導入することは可能であると考えた。しかしながら、TIASで招聘する講師は現場担当者であり、エグゼクティブ教育で求められるスポーツ組織の幹部を招聘した講義を行うためにはスポーツ組織との連携を強化するという条件をクリアする必要がある。

次に、スポーツエグゼクティブ教育におけるスポーツ組織と大学との連携では、日本のスポーツ組織に大学と組んで教育プログラムをつくる意欲がない限り、筆者はスポーツ組織と大学が連携したスポーツエグゼクティブ教育を日本の大学院プログラムで実施する可能性は現状難しいと考えた。さらに、スポーツエグゼクティブ教育における教育環境の準備可能性では、ホテル、移動手段、ケータリングなどのエグゼクティブ教育を行う際に必要な環境への理解が不足していることから、日本の大学院プログラムの運営者が補助的サービスについて意識を変えることで、スポーツエグゼクティブの要求水準に対応することは可能であると考えられた。最後に、スポーツエグゼクティブ教育を日本の大学院で運営するために必要なその他の条件として、日本で大学院プログラムを運営する教員とは違う、コーディネーターの役割を持つスタッフの存在がなければならないということが示唆された。その他、TIASは学生が世界中から集まり、学生の出身地の地理的多様性をMESGO同様に確保できた。しかしながら、これはTokyo2020という特別な

条件下でこそ成立できたと考えられ、今後も積極的に学生の出身地の地理的多様性を意識した募集や入試を考える必要がある。最後に、大学院設置上の法的な側面として、日本におけるスポーツエグゼクティブ教育を集中講義 10 回論文指導、最終的に論文を提出することによって、修了要件の 30 単位を満たすことは可能であると考えられた。しかしながら、複数大学によって欧州では大学院プログラム運営をされていることを参考にするならば、日本やアジアの複数大学が組んで大学院プログラムを構築し、それぞれの大学ができる範囲でセッションを受け持つことで、我が国においてスポーツエグゼクティブ教育を行う大学院プログラムを開講する可能性は高まることが示唆された。